

## 「高市皇子挽歌」を通して

### 発生論から

古橋 信孝

一、死者の事蹟をうたうことで鎮魂する〈戦さ謡〉を始源的に想定しうること

死とは個体としての終りであり、共同性に還ることである。死者が先祖に同化するとは、先祖が血筋の共同性を意味するゆえ、まさに死者の個体が共同体へ転移することを示している。村落共同体において、一般的な死は、共同体に一定の死者に対する神謡があり、その神謡に則って、おそらく固有名詞などの変更だけでうたわれ、鎮められた。それに対し異常な死はどう鎮められたか。万葉の菟原処女の長歌などのように、事件を語り継ぐことが鎮魂となった。それは語り継ぐことで共同性へ掬い取られるからである。異常な死として、英雄の戦死がある。沖繩宮古狩俣の『祖神ニーリ』の第三章にはマヤノマブクイの戦死がうたわれている。『祖神ニーリ』は正月願い、夏の穂祭りという村落共同体の繁栄を願う祭りにうたわれる謡である。したがってマブクイの戦死は村落の繁栄をもたらすものだったはずだ。やはり戦死が共同体に転移している。それゆえ鎮魂となる。ならば〈戦さ謡〉は戦死ではなくともありうるではないか。死者の生前の事蹟としての戦闘。同じ宮古に『仲宗根豊見親与

那国攻入のアヤゴ』『目黒盛豊見親島鎮めのアヤゴ』などの〈戦さ謡〉がある。事蹟を語り継ぐことで、死者の個体が共同体のものになり、それゆえ鎮魂される。

とするならば、高市皇子挽歌のもつ戦闘場面も、そのように〈戦さ謡〉の系譜に位置づけられるはずである。高市の戦さによって共同体<sup>ヤマト</sup>日本国家に安定と繁栄がもたらされたとうたう（「定めてし瑞穂の国」「万世に 然もあらむと」）ことで、高市の死は共同性へ転移し、鎮魂されることになる。

一、戦闘場面といっても、ほとんど戦さの準備というか、陣容しかうたわれていないこと

奄美の『芭蕉ナガレ』が芭蕉布の生産過程を延えんとうたいづけることで、芭蕉布の神衣たりうる質を表現しているのは、神に授かった芭蕉で、神に教えられた製法で間違いなく作った芭蕉布だということだとかんがえられる。そのような表現を始源的な神謡のものだとすると、この挽歌の戦闘場面も、神に教えられた通りの陣容で戦うのだから勝つのだとうたっているとみられる。伊勢の神がうたわれるのも、伊勢の神に教えられた通りなのだから、神が援護するということか。意味としてそうだというのではなく、そのような表現の構成になつていくという意味で。

一、長歌は神謡を方法化したものであること

神謡は神にかかわるものゆえ、日常の言語秩序とは区別される。その具体的な型が音数律であり、繰り返しである。この挽歌もそれらをもつが、繰り返しを構成として方法化している。たとえば死への哀惜は宮人とうたい手と二度繰り返される。村落の具体性が抽象化された国家の儀式歌であるゆえ、表現自体がもつ具体性が具体性

そのものとしてあらわれざるをえなくなり、死の個性が弾き出されて、鎮魂されねばならないからそうなるのである。それは神謡のもつ表現に則ってこそ、つまり、神謡に支えられてありえたのである。

挽歌は、以上のように共同性（古代とは共同性として把握できる）の問題から、始源的な表現である神謡との繋りにおいてみていくべきである。これが発生論という方法である。

## 「高市皇子挽歌」を通して

### 様式論から

森 朝男

万葉長歌中最大のこの長歌の前半九十句ほどの叙述構成をたどってみると、それは決して史実としての壬申の乱をも、壬申の乱における高市皇子の活躍をも叙述してはいない。この九十句の叙述はむしろ事実を超えたある意味性を喚起する。その意味性をかたち作っているもの、ないしはその意味性そのものこそが、すなわち様式である。九十句は次のように展開する。

①天武天皇の「天降り」（実は和歌宮への出御） ②天皇の高市皇子への全軍指揮委任 ③皇子の奮戦 ④敵の身を捨てての逆襲 ⑤神風と「常闇」の現出 ⑥皇子の敵軍平定 ⑦天皇の国内治定・即位

この展開の中で①と⑤の部分の表現に注目してみたい。①の部分には「明日香の 真神の原に ひさかたの 天の御門を 畏くも

定め給ひて 神さぶと 磐隠ります やすみしし わご大君の……  
高麗剣 和甕が原の 行宮に 天降り座して」とあって、明瞭に「天降り」と歌われている。一方⑤の部分は敵の逆襲の中、「渡会の 斎の宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の眼も見せず 常闇に 覆ひ給ひて」とあり、すぐ続いて「定めてし 瑞穂の国を 神ながら 太敷きまして」と、⑥⑦の乱平定と国内治定・即位の叙述に移る。この「常闇」とは天照大神の岩戸隠れの時の「常夜」（記）、「常闇」（紀）、神功皇后の忍熊・香坂王平定譚中の「常闇」（神功撰政元年二月紀）などに相通するもので、本来は靈力更新の鎮魂祭の夜（冬至の長夜）を意味し、説話に応用されて戦闘中の危機回生の折り目を示すようにもなったものである。倭建命の伊吹山の危機における谷の暗さや、神武天皇の熊野の「をえ」なども同様式のものであって、即位直前の苦難・試練を意味し、成年式的試練の意味を内包させるものでもある。

そのように見ると、①⑦の展開は、へ降臨↓戦闘↓危機↓回生勝利↓平定・即位↓という、記紀神話でいえば天孫降臨から神武肇国までの叙述に見合う、始祖伝承・肇国伝承のパターンを持つことになる。

ところでこの展開の中における皇子は、天皇を助けて直接全軍を指揮する位置にあり、それは後半五十九句冒頭の、乱後の皇子に対応する、「天の下 申し給へば」という太政大臣的地位の叙述に対応する。前半九十句の戦闘叙述を肇国神話のパターンに様式化することによって、皇子の乱後の太政大臣としての地位を必然化しているのである。つまり前半の述べた如き構成は後半のこの叙述のためになされたのである。そうしてこの後半の叙述に関してそのような